

私たちと聖書

We and the Bible

第1集



私たちと聖書（第一集）

著者 峰本義明

はじめに

聖書はおよそ千九百年前に完成して以来、様々な言語に翻訳されて世界中で読み継がれています。多くの人々が聖書に影響されました。その結果、私たちの身近なものに聖書の影響があります。

本書では、私たちの身近な様々なものに潜む聖書の影響についてご紹介します。そして、聖書が私たちに与えて大切なメッセージを伝えていることをお知らせします。

なお、本書は伝道出版社で毎月発行している「みちしるべ」誌において、二〇一四年九月から二〇一七年一二月までの間に連載されたものを電子書籍用として一冊にまとめたものです。そのため、各テーマが一話完結の形式となっております。

ページ順に読むのも良いですが、興味のあるテーマを選んで読むこともできるよう、今回はこの形式をそのまま残して構成しました。この本が読まれた方にとって、少しでも聖書を理解する助けとなることを切に願っております。

二〇二〇年 五月

目次

夏目漱石	4
芥川龍之介	6
村岡花子	8
宮沢賢治	10
遠藤周作の『沈黙』	12
山上憶良の貧窮問答歌	14
ジョン・バナヤンの『天路歷程』	16
ナルニア国物語	18
ことわざ「目から鱗が落ちる」	20
ことわざ「豚に真珠」	22
ことわざ「狭き門」	24

夏目漱石

●夏目漱石『三四郎』

夏目漱石は近代日本における知識人の苦悩を描き、国民作家として親しまれています。学校の国語の教科書にも『夢十夜』、『こころ』などの作品が載せられています。

その夏目漱石は聖書を愛読していました。彼は文部省の給費留学生としてイギリスに留学したことがありますが。その際に聖書に出会ったのでしょう。漱石は英語の聖書を読み、その余白に様々に書き込みをしています。今、彼の書き込みが残されている聖書は東北大学図書館の「漱石文庫」に収蔵されています。

その漱石に『三四郎』という小説があります。熊本の高等学校を卒業して東京の大学に入学した小川三四郎は、目新しい都会での生活の中で、自由気ままにふるまう都会の女性の里見美禰子に出会い、惹かれます。しかし、美禰子は別の男性と結婚することになりました。彼女に会うために教会に来た三四郎に対して、美禰子は次の謎めいた言葉を残します。「われは我が愆（とが）を知る。我が罪は常に我が前にあり」。

●ダビデの苦しみ

これは聖書の詩篇51篇3節の言葉です。「まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いとも私の目の前にあります」と、イスラエルの王であるダビデは神様の前に告白しました。ダビデは神様の前

に正しい道を歩んでいた人でした。しかし、彼は自分の家来であるウリヤの妻バテシエバを愛し、ウリヤを戦いの最前線に送って戦死させ、バテシエバを自分の妻としてしまいました。それを神様に遣わされた預言者に指摘されたとき、彼は自分の罪を認めて神様の前に告白したのでした。

ダビデの犯した罪は、彼が神様から受けた数々の恵みを裏切るものでした。しかし、ダビデがその罪を認めて告白したとき、神様は彼の罪を赦してくださいました。「主もまた、あなたの罪を見過ごして下さった」（サムエル記第二・12章13節）と言われたのです。

● 罪の告白

美禰子は、自分が無意識のうちに三四郎を誘惑していた罪を告白したのでしよう。ダビデは自らの大きな罪を神様に告白しました。これはあなたにも大いに関係のあることです。

あなたは真の神様に愛されている存在です。しかし、その神様を認めずに生きているあなたは、神様の愛を無視しています。それは神様の前に大きな罪なのです。

あなたもあなたの罪を認めて、神様の前に告白する必要があります。その時、神様はあなたを豊かに赦してくださいます。どうか、聖書のメッセージに耳を傾け、自らの罪を告白する方となりますように。

芥川龍之介

●芥川龍之介の死

芥川龍之介は大正時代に活躍し、短編小説を得意として数々の優れた作品を残した天才的な作家です。皆さんも中学校で『トロッコ』を、高校で『羅生門』を、それぞれ国語の時間に読んだことがあるかもしれません。毎年発表される「芥川賞」という文学賞は、この芥川龍之介を記念して創設されたものです。

芥川龍之介は1927年(昭和2年)に35歳という若さで亡くなりました。自殺でした。致死量の睡眠薬を飲み、そのまま二度と目覚めることはありませんでした。人気作家の死に、当時の人々は強い衝撃を受けました。

その芥川の死の枕元には聖書が置かれていました。彼は普段から聖書を読んでいました。キリシタンを題材とした小説をいくつも書いていますから、彼が聖書に親しんでいたのは当然とも言えます。しかし、芥川は自殺してしまいました。枕元に置かれていた聖書を、彼は死の間際に開いたのでしょうか。そして、この天才小説家の死を、聖書は引き留めることができなかつたのでしょうか。

●いのちと滅びとの分岐点

私は、聖書に芥川を救う力がなかつたとは考えません。そうではなく、芥川が聖書の力を受け入れなかつたのだと思います。聖書には確かに人を救う力があります。しかし、人がその聖書を受け入れなければ、その力

は發揮されません。

例えば、伝染病にかかって死の淵に追い込まれた人のことを考えてみましょう。その伝染病に良く効く薬が開発されたとします。彼にはその薬が開発されたことが知らされました。すなわち、自分が助かるための知識を、彼は手に入れたのです。では、それだけで彼は助かるでしょうか？ いいえ、彼がその特効薬を実際に飲まなければ、すなわち彼自身が受け入れなければ、助かることはありません。

このように、人はどんなに聖書に親しみ、聖書についての知識を得ようとも、それだけでは救われません。聖書のみことばを自分自身のものと受け入れ、聖書によつて示された罪を認め、イエス・キリストによる救いは自分自身のためのものだと受け入れる必要があります。

聖書はこう教えます。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる」(ヨハネの福音書3章36節)。聖書に示されていることが他ならぬあなた自身のことなのだと受け入れるかどうか、いのちと滅びとの分岐点だと言えるのです。

● 永遠のいのちにふさわしくない者

イエス・キリストの弟子パウロが伝道旅行中にユダヤ人に対して福音を語ったとき、彼らはパウロの福音を拒みました。その時、パウロはこう証しました。「あなたがたはそれ(福音)を拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです」(使徒の働き13章46節)。

聖書が無力なわけではありません。人は聖書を拒むので、自らを「永遠のいのちにふさわしくない者」とするのです。あなたはいかがですか？

● 『赤毛のアン』の翻訳者

村岡花子はL・M・モンゴメリが書いた『赤毛のアン』のシリーズを翻訳して日本に紹介した人として有名です。連続テレビ小説でも彼女が主人公となる物語が取り上げられ、多くの人がその存在を知ることとなりました。この『赤毛のアン』シリーズはシェークスピアなどの古典から引用された箇所が多いのですが、聖書からの引用も大変多いそうです。そして、これを訳した村岡花子自身も聖書と深い関係のある人です（テレビドラマではそのあたりのことはあまり描かれませんでしたね）。

村岡花子は貧しい農家の生まれでした。父がクリスチャンで、自分の娘が優秀であることが分かると、多くの犠牲を払って花子を東洋英和女学校の給費生として入学させます。そこで彼女は聖書に深く親しんだようです。彼女もまたクリスチャンとなり、後にモーセに関係する本を翻訳したりしています。

また、花子が結婚した夫の父である村岡平吉という人は印刷業を営み、聖書や賛美歌の本などを数多く印刷しました。「バイブルの村岡さん」と言われて有名だったそうです。

村岡花子は明治期に生まれ、戦争の時代を経ても聖書に親しみ続けました。その義父である村岡平吉も明治から大正の時代にかけて聖書の印刷で大きな足跡を残しました。近代化する日本の中で、こうした人々の働きによって私たちは今日、聖書を手にして読むことができます。

●本の中の本

聖書は不思議な本です。今までにこれほど憎まれた書はありません。また、これほど愛された書もありません。聖書はそれが完成して以来、多くの人々によって攻撃されました。古くはローマ帝国がクリスチャンと共にその存在を抹殺しようとしてきました。近年になっては科学思想や無神論が非科学性を論拠に聖書を罵倒しました。しかし、それにもかかわらず、聖書は今も印刷され続けて、多くの人々に救いと希望を与えています。

また、聖書は多くの人々に愛されました。『アイヴアンホー』で有名なイギリスの作家ウォルター・スコットは死の床にあつて、息子に「本を持って来てくれ」と頼みました。息子が「どの本ですか？」と尋ねると、スコットは「本と言えば聖書に決まっているではないか」と答えたそうです。死にかけて人をも勇気づける力を持った「本の中の本」が聖書です。

●「私の足のともしび」

でも、聖書はあなたにこそ必要な本なのです。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」(テモテへの手紙第二・三章16節)とあるように、聖書はあなたを救いへ導くために書かれた、神様からの特別なメッセージです。あなたが真面目な心で聖書から教えを受けたい、聖書の示す神様とイエス様について知りたいと願うならば、聖書は豊かに神の知恵を与え、あなたの人生を導く光を示してくれます。

「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩篇116篇105節)

● 『銀河鉄道の夜』

宮沢賢治は大正期から昭和初期にかけて活躍した詩人・童話作家です。岩手県の花巻農学校の教師をしながら、幻想的な詩や多くの童話を書きました。『雨ニモマケズ』や、『風の又三郎』、『注文の多い料理店』などの童話を読んだことがおありでしょう。

その宮沢賢治は創作活動だけでなく、農学者として地域の農民たちを献身的に指導していました。賢治は37歳で亡くなりましたが、その死の前日には夜遅くまで農民の肥料の相談に乗っていたそうです。賢治がこのように自己犠牲の精神が旺盛だったのは、彼が法華経を信仰していたことと関係がありますが、同時に聖書の影響も見てとれます。

賢治の代表作の一つに『銀河鉄道の夜』があります。これは、孤独な少年ジョバンニが友人のカムパネルラとともに銀河鉄道の旅をする物語です。友人のザネリから嫌がらせを受けたジョバンニは、ある夜、「銀河ステーション！」というアナウンスの声を聞きます。ふと気づくとジョバンニは銀河鉄道に乗っており、そこにカムパネルラもいました。プリオシン海岸やサウザンクロス（南十字）を旅して、ジョバンニはこの旅が死者の世界を旅していることに気づきます。そして、カムパネルラにどこまでも一緒に行こうと声をかけますが、いつの間にかカムパネルラの姿は見えなくなり、やがてジョバンニは丘の上で目覚めます。すると、カムパネルラ

が川に落ちたザネリを救った後、溺れて行方不明になったことを知るので。

●友を救うための犠牲

ジヨバンニという名前はイタリア語で、聖書の中の「ヨハネ」に当ります。また、タイタニツク号の遭難にあった少女と神について議論する場面も出てきます。聖書の影響を思わせられます。

何より、カムパネルラの行為は友人を救うために自らが犠牲となるものです。しかも、救われたザネリという少年はジヨバンニに意地悪をするような人物です。そのような友人のために、カムパネルラは自らの命を差し出したのでした。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（ヨハネの福音書15章13節）とイエス様は教えました。友のために自分の命を犠牲にするほどの大きな愛はないでしょう。そのような行為は、私たちを深く感動させるものです。

●イエス・キリストの十字架

「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ人への手紙5章8節）とパウロは告げます。私たちはイエス様の「友」ではありませんでした。むしろ「罪人」で、神様を無視していた者です。しかし、そのような私たちを愛して、イエス様は十字架にかかってくださいましたのです。あなたに、あなたを本当に愛している「友」はおられますか？ イエス様こそ、あなたを愛して、あなたのために命を捨ててくださいました御方なのです。

遠藤周作の『沈黙』

●『沈黙』の衝撃

キリスト作家として知られている人に遠藤周作がいます。彼の代表作の一つが『沈黙』です。私はこの小説を大学生の時に、ゼミの先生から紹介されて読み、衝撃を受けました。

小説は江戸時代、島原の乱が収束して間もない長崎が舞台です。キリスト教に対する過酷な弾圧が行われている中、イエズス会の宣教師であるロドリゴはある日本人の手引きで五島列島に潜入します。しかし、その日本人に密告され捕らえられたロドリゴは、棄教を迫られます。そして、自分が棄教しなければ捕らわれている日本人信者への拷問が止まらない、という状況を突きつけられたロドリゴは、神様に「今こそ沈黙を破って奇跡を起こすべきだ」と訴えます。しかし、神様からは何の応答もありません。そして、ロドリゴは棄教を受け入れ、踏絵を踏むのです。

ロドリゴの棄教にはまだ複雑な背景がありますが、この神様の「沈黙」について、大学生だった私はいろいろと考えさせられました。果たして神様は、私たちに対して関心を持たない方なのでしょうか？

●身近におられる神様

神様が私たちに深い関心を持っておられることは、聖書の様々な箇所から知ることができます。

「イエスは彼らに答えられた。『わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。』」（ヨハネの福音書5章17節）

「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」（テモテへの手紙第一・2章4節）
これらから、神様は今も働いておられることがわかります。また、第1テモテの引用箇所は、英語の聖書を見ると現在形で書かれています。ですから、神様は今現在、私たちが救われることを望んでおられるのです。

では、なぜ神様は私たちの困難な時に応えてくださらないのでしょうか。実は、ロドリゴが期待したような奇跡的な救いはもう行われぬ、と考えられます。奇跡は、聖書には「証しとしての奇跡」だと示されています。奇跡とは、まだ人々がイエス様を救い主だと認めていなかった頃に、イエス様が間違いなく神様から遣わされた方であることを証拠立てるために行われたものです。しかし、現在はイエス様が神の御子であることを明確に証拠立てるものが完成しています。それは『聖書』です。

●聖書の雄弁なメッセージ

「完全なものが現われたら、不完全なものはずたれます」（コリント人への手紙第一・13章10節）とあるように、イエス様を証しするものとして完全な聖書が完成しました。だから、もう不完全なものである「奇跡」は必要ないのです。

聖書は人を救いに導くのに十分なものです。私たちは聖書を読むことによって神様の御心を知り、イエス様が救い主であることを知ります。そして、その聖書のメッセージを信じ受け入れることで、あなたは救われます。

「人は心に信じて義と認められ、□で告白して救われるのです。」（ローマ人への手紙10章10節）

山上憶良の貧窮問答歌

●万葉歌人、山上憶良

日本で最古の和歌集として知られているのは『万葉集』です。そこで活躍した歌人の一人に山上憶良がいます。憶良はたいへん子煩悩であつたらしく、「憶良らは今は罷らむ 子泣くらむ そのかの母も 吾を待つらむぞ」と、子どもが泣いているだろうから宴席を失礼すると歌っています。しかし、憶良が可愛がり、彼の足元にまとわりついていたその幼子が亡くなった時、憶良は半狂乱になつて嘆き悲しみます。そして子を弔う一組の長歌と短歌を歌いました。その短歌は「稚ければ 道行き知らじ 幣は為む 黄泉の使 負ひて通らせ」です。子どもはまだ幼くて黄泉への道を知らないのです、お礼はするから背負つて連れて行ってやってくれと黄泉の使いのものに頼む内容です。最愛の子どもを失い、なすすべもない親として、せめてもの心づかいに溢れた切ない歌です。

●親しい人々の死

親しい人々に先立たれた者の悲しみは、古今東西共通のものだと言えます。イエス様の周囲にも同様の悲しみにくれた人がいました。

イエス様がナインという町に近づいた時、ある葬列に出会いました。やもめとなつた母親の一人息子が亡く

なり、その亡骸を埋葬するものでした。「やもめ」ですから、この女性にはご主人がいまません。おそらく、何らかの理由で亡くなったのでしょう。彼女にとってこの一人息子は、単に愛する息子というだけでなく、自分が信頼できるただ一人の人だったことでしょう。その一人息子が亡くなってしまったのです。彼女の悲しみは想像を絶します。

私は教え子の葬儀に参列したことがあります。彼は高校を卒業し、難関大学に推薦で入学して間もなく、白血病を発症しました。そして、約1年間の闘病生活を経て、若干20歳で亡くなりました。闘病中はいつも前向きに物事を捉えていた彼でしたので、その死の知らせはとてもショックでした。彼のご両親もまだお若く、私をはかける言葉もありませんでした。言い古された言葉ですが、人は死の前に無力である、というのは真実です。山上憶良の時代から現代に至るまで、死への無力さは何ら変わりありません。

●いのちの君、イエス・キリスト

しかし、イエス様は違います。イエス様は母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい」(ルカの福音書7章13節)とおっしゃいました。そして、近寄って棺に手をかけて、「青年よ。あなたに言う、起きなさい」(同14節)と言われました。すると、死んでいた一人息子が生き返ったのです。「イエスは彼を母親に返された」(同15節)と聖書は報告しています。私たちなら「ご愁傷様です」としか言えない状況で、イエス様は「泣かなくてもよい」と言うことができます。それだけでなく、死を解決できるのがイエス様です。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。」(ヨハネの福音書11章25節) このイエス様にあなたの全てを委ねてはいかがでしょうか。

ジョン・バニヤンの『天路歷程』

●バニヤンの『天路歷程』

ジョン・バニヤンという人をご存知でしょうか。彼は17世紀のイギリスで活躍した説教者であり、『天路歷程』という本を著したことで有名です。

この『天路歷程』は、人が救いを受け、信仰者として歩む人生を、旅物語の寓話として描いています。主人公は「基督者（クリスチャン）」という人で、最初は「滅亡の都」に住んでいたのですが、そこを出て旅に出かけます。その途中で「虚栄の市」での誘惑や破壊者アポリュオンとの戦いなどのさまざまな困難を経て、ついに天の都にたどり着きます。これには深い意味が込められていて、とても興味深いものです。ぜひ、ご一読をお薦めします。私が今回特に取り上げたいのは、基督者が滅亡の都を出て行く場面です。それはすなわち、人が悔い改めることに当たります。人はどのように悔い改め、どのように救われるのか、『天路歷程』は私たちに有益な示唆を与えてくれます。

●滅亡の都からの逃走

基督者は自分が生まれ育った滅亡の都に慣れ親しんでいました。しかし、ある時に彼はその都から逃れようとしています。それは、自分が裁きに定められており、しかも、背中に重い荷物を負っていることに気付いたからです。

どうして基督者は突然に背中の重荷に気付いたのでしょうか。それは、彼がある本を読んだからでした。その本とは、もちろん聖書です。

聖書こそ、私たちに真の知識をもたらしてくれる本です。普段の私たちは、自らの周囲にある空気存在に気付かないように、自らの罪を自覚することはありません。しかし、聖書の光に照らし出されると、私たちは誰もが神様の前に罪人であるとはつきり知らされます。

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません」（ローマ人への手紙3章23節）と聖書は告げます。私たちが罪人だということは、聖書の言葉に目を向けないと気付くことができないのです。

基督者は聖書を読んで、自らの罪に気付きました。彼は居ても立つてもいられず、彼を呼び戻そうとする家族の声を聞くまいと耳に指を差し込んで、滅亡の都を走り出て行きます。あなたも、自分が滅びに定められていると気付いたならば、そこから逃れなければなりません。では、どこへ向かうべきでしょうか。

●十字架の丘

聖書が幸いなのは、私たちが向かうべき場所も教えてくれる点です。基督者は伝道者や助力者、好意者、解説者などの助けを受けて、彼の進むべき道へと導かれます。そして、坂の上に十字架を見たとき、彼の背中の重荷はひとりでに解けてしまいました。

「聖書はあなたの罪を解決する方法を教えます。それは、イエス・キリストの十字架の下に来ることです。」「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒の働き16章31節）と約束されています。あなたが目指すべきなのはイエス・キリストです。この方を信じて、滅びから救われますように。

ナルニア国物語

●ナルニア国物語

『ナルニア国物語』という児童文学があります。イギリスの伝道者であるC・S・ルイスという人が1950年代に執筆したもので、全7巻からなる物語です。最近、第3巻までが映画化されたので、ご存知の方もおられるでしょう。実はこの物語は、ルイスが聖書の基礎を子どもたちに分かりやすいようにと書いたもので、聖書の影響を色濃く持っています。

主人公はペンシー兄弟という二男二女の子どもたちです。第二次世界大戦の時に、彼らは田舎の家に疎開してきました。その家で、末妹のルーシイが空き部屋にあった衣装ダンスを開けて奥に入っていくと、雪に閉ざされた世界が広がっていました。それが別世界「ナルニア国」でした。

第1巻の『ライオンと魔女』では、ペンシー兄弟たちが不思議なライオン、アスランに導かれて、冬の世界に閉じ込められていたナルニア国を支配する白い魔女からナルニア国を解放しようと奮闘します。次兄のエドモンドが白い魔女にだまされて囚われ、彼を助けるためにライオンのアスランが身代わりに死んでしまいます。長兄のピーターは魔女と戦い苦戦しますが、朝になってアスランがよみがえり、白い魔女は倒されるのです。

●王の中の王

ナルニア国の創造主であり、王でもあるライオンのアスランはキリストを表しています。私たちはイエス様を救い主として知っていますが、実はイエス様は「王」でもあります。

聖書は、神様について「神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主」（テモテへの手紙第一・6章15節）と記しています。同時にイエス様についても「小羊は主の主、王の王だからです」（黙示録17章14節）と記していて、イエス様は神様と同一の権威を持つ王であることが分かります。

日本は王制を取っていませんので、王と言われても実感はないかもしれません。でも、王とは権威ある支配者です。私たちは支配者が正しく良い人であって欲しいと願います。もし、悪い王が悪政を敷いた場合、そこに暮らす国民はどんなに苦しむでしょうか。しかし、「善王」つまり権威を持つとともに愛の深い人が王であったら、どんなに素晴らしいことでしょう。

●王の犠牲と復活

王であるイエス様は、国民である私たちを滅びから救うために身代わりに十字架にかかり、私たちが受けるはずの裁きを受けてくださいました。そして、死を打ち破って復活されました。「この方が死にながれていることなど、ありえないからです。」（使徒の働き2章24節）イエス様こそ「王の王」、王の中でも最も素晴らしい王です。イエス様が王となって地上を支配する時はまだ来ていません。「今は恵みの時、今は救いの日」（コリント人への手紙第二・6章2節）だからです。そして、その時は必ず終わりが来ます。その時までにはイエス様の下に来ない人は「泣いて歯ぎしりする」（マタイの福音書24章31節）ことになります。どうぞ早く、イエス様をあなたの救い主として受け入れますように。

「じこわざ」目から鱗が落ちる

●聖書とことわざ

聖書は約1900年前に完成した書物です。その後、迫害をくぐり抜けて人々に読み継がれていきました。聖書は最初、西欧に広まりました。そのため、ヨーロッパ諸言語には聖書にちなんだ表現がたくさんあります。

では、日本語ではどうでしょうか？ 意外に思われるかもしれませんが、日本語にも聖書に由来する表現・言い回しがいくつもあります。そこで、私たちが時折耳にする表現で、聖書に由来するものを紹介していきましょう。初めに取り上げるのは「目から鱗が落ちる」という表現です。これは、「あることをきっかけに、今までわからなかったことが急に理解できるようになること」のたとえです。実は、この表現は聖書の『使徒の働き』の箇所が元になっています。

「するとただちに、サウロの目からうろこのようなものが落ちて、目が見えるようになった。」（使徒の働き9章18節）

サウロとはイエス・キリストの弟子です。この後、彼はパウロと呼ばれ、キリストの使徒として偉大な働きをするようになります。サウロは、この直前まで一時的に目が見えなくなっていました。しかし、アナニヤという人が彼のところに来て、彼の上に手を置いたとき、サウロの目から鱗のようなものが落ちたのです。一体何が起こったのでしょうか。

● サウロの回心

サウロは、以前は迫害者でした。彼はユダヤ教に熱心な人物で、イエス様を救い主と仰ぐクリスチャンたちは神様を冒瀆していると考えていました。そこで、クリスチャンたちを迫害し、逮捕し、死にまで追いやりました。ある時、サウロはダマスコという町に向かいました。そこでクリスチャンたちを捕らえるためです。

ところが、その途上で天からの光がサウロを照らしました。そして、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声が掛けられました。それは、死から復活して、天にお帰りになったイエス様からの声でした。イエス様はご自身の愛されるクリスチャンを迫害しているサウロを裁くのではなく、愛をお示しになりました。サウロは、この超自然的な出来事を経験して、自分に対する神様の特別な愛を感じました。そこで、サウロはイエス様を救い主と受け入れ、アナニヤからパプテスマを受けて、クリスチャンとして、キリストの偉大な使徒として歩み出したのです。

● 「罪人のかしら」

サウロ（名を改めてパウロ）は後に自分の歩みをふりかえり、「私はその罪人のかしらです」（テモテへの手紙第二・一章15節）と告白しました。イエス様のために命を惜しまずに働き、多くの人々を信仰に導いたパウロですが、彼が自分を「罪人のかしら」と言ったのは、自分が迫害者だったという事実に基づいているのでしょうか。私たちも神様の前に謙虚に自分を見つめるのなら、パウロと同じ言葉を告白しなければなりません。しかし、神様はパウロを愛して信仰に導いたように、あなたのことも深く愛しているのです。

「ことわざ」豚に真珠

● 「豚に真珠」の意味

聖書に由来することわざの一つに「豚に真珠」というのがあります。これは、「値打ちがわからない者には、どんなに価値のあるものを与えても意味がなく、むだである」という意味です。「あの人に骨董品の壺を贈っても、『豚に真珠』で無駄なことだ」などと使います。

この「豚に真珠」は、聖書のマタイの福音書にあるイエス様の言葉が基になっています。

「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。」(マタイの福音書7章6節)

ここでも「真珠」は価値あるもの、「聖なるもの」であることがわかります。その価値を「豚」は理解することができず、かえってだめにしてしまうのです。

私たちにとって「豚」は身近な存在です。豚そのものはあまり見かけることはありませんが、食用肉として豚は欠かせません。また、豚は意外にもきれいな好きで、自分のまわりをとでもきれいにする習性を持っているそうです。子豚のかわいらしさはよく知られていて、子どもの絵本などにも豚は欠かせないキャラクターです。それなのに、聖書における豚の扱われ方のひどさはどうしてなのでしょうか。

●聖書における「豚」

実は、聖書において豚は「汚れた」動物です。旧約聖書のレビ記には聖い動物（すなわちイスラエルの人々が食べてよい動物）の条件が二つ記されています。一つは「ひづめが分かれているもの」、そしてもう一つが「反芻するもの」です。その解釈の一つとして、「ひづめが分かれている」とは私たちの日々の歩みが聖別されるべきことを、「反芻する」とは私たちが日々神様のみことばを良く理解すべきことを、示しているようです。豚はひづめが分かれていますが、「反芻しない動物」です。したがって豚は汚れた動物であり、イスラエルの人々が食べてはならないものだったのです。

もちろん、クリスチャンはこうした律法の制約から解放されていますから、豚肉も神様からいただいた食物として感謝して食べます。問題は、私たちが日々聖く正しい歩みをしているか、神様のみことばを読み味わってそれに従っているか、です。残念ながら多くの人々は、この神様の御心に反して毎日を送っていると言えるでしょう。

●「聖なるもの」とは

一方、「聖なるもの」とは何でしょうか？ すべての人にとって価値のあるもの、あなたを滅びから救う唯一のもの、そう考えると、これはイエス様ご自身のことだと言えそうです。イエス様の価値は計り知れませんが、あなたを心から愛し、あなたを滅びから救うために身代わりに神様からの裁きを受け、十字架にかかってくださったのです。

そのイエス様の価値を認めようとしないのは、あまりにも惜しいことです。「豚に真珠」の意味を思い起こし、あなたが真に価値のあるイエス様を受け入れますよう、お薦めいたします。

● 「狭き門」の意味

大学入試などが難しいときに「狭き門」という表現がよく聞かれます。この「狭き門」というのは「競争者が多くて就職や入学などがむずかしいこと」をたとえる表現として知られています。「競争相手が多くて大変だが、頑張つて『狭き門』から入れ」と激励したりします。ちなみに、フランスの作家アンドレ・ジイドには『狭き門』という題の小説もありますね。この「狭き門」は次のイエス様の言葉が元になっています。

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」（マタイの福音書7章13〜14節）

先に示したとおり、一般に「狭き門」とは「競争者が多くて」入るのが難しいことのとえです。しかし、イエス様のこの言葉を見ると、「狭い門」すなわち「いのちに至る門」は「見いだす者はまれ」だと記されています。見いだす者、つまりそこから入りたいと思う者があまりいないのならば、倍率は低くなるわけですから、その門は広いのではないのでしょうか。

● 「滅び」に急ぐ足

難関の大学入試がなぜ「狭き門」になるのかというと、入学希望者の多さに対して募集定員が少ないからです。もし、どんなに希望者が多くても募集定員が十分に多かつたら、それは「広い門」になるはずで

す。イエス様の言われる「滅びに至る門」とはそういう門です。そこから入っていく者が多く、しかも定員の限界はありません。だから、それは「広い門」です。

多くの人々は神様を認めたがりません。神様の存在を認めたならば、神様に従わなければならないからです。人々はそれが嫌で、自分の人生を思い通りに生きたいと願っています。だから、自分の思い通りに生きることのできる「門」があれば、喜んでそこを通っていきます。しかし、それは「滅びに至る門」です。神様を認めないという大きな罪の報いを、人々はいずれ自ら刈り取らねばなりません。多くの人々は喜びながら「滅び」に向かつてまっすぐに歩いていくのです。ああ、それは何と多くの人々でしょう。

● 「狭い門からはいりなさい」

「狭い門」は「いのちに至る門」です。この門から入れば、まことのいのちに至ることができません。でも、それには条件があります。自分は神様を認めず、神様に対して罪ある存在だと認めなければなりません。そして、イエス様はそんな私を救うために、私の代わりに十字架にかかってくださった、と受け入れる必要があります。多くの人はこのことを認めたがりません。だから「見いだす者はまれ」な「狭い門」なのです。しかし、ぜひこの門から入るべきです。そして、あなたの命を滅びから救い出すべきです。

イエス様は私たちに告げています。「狭い門からはいりなさい」。ぜひ、イエス様を信じられますように。



聖書はあなたに知恵を与えて、
キリスト・イエスに対する
信仰による救いを受けさせることができます。
—テモテ第二の手紙3章15節—

私たちと聖書（第1集）

2020年5月1日

著 者：峰本義明

編 集：みちしるべ編集室
